



慈しみとまことは出会い
義と平和が口づけをする。

詩編 第85編11節

Wesley Hall News

ウェスレー・ホール・ニュース

No.152 Autumn 2026

目標を目ざして

フィリピの信徒への手紙 第3章12～14節

私は、すでにそれを得たというわけではなく、すでに完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスによって捕らえられているからです。きょうだいたち、私自身はすでに捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

新学期がはじまりました。新しい目標を立てて新学期をスタートされた方も多いのではないのでしょうか。目標を立てることは大切なことです。目標に向けて、日々の生活を営んでいきます。パウロは「目標を目指してひたすら走る」と言っています。一度目標を立てたら、それに向かってひたすら走るのですから、ゴールを間違えないようにしなければいけません。私はかつて、月に一度、岡山の被災地支援に通っていました。毎回、レンタカーを借りてナビに頼りながら走っていたのですが、ある日、いつもとは雰囲気の違い空港に到着しました。実は岡山には空港が二つあり、私は誤った空港をナビに設定してしまっていたのです。ひたすら走った末に、まったく違う場所に到着してしまいました。ゴールの設定が間違っていたのです。ひたすら走っても、目標の設定が間違っていれば、迷子になってしまう。何を目指して生きていくのか、目標を常に吟味しつつ、設定する必要がありますね。

では、パウロの目標を見てみましょう。パウロはかつて、律法の遵守や宗教的な実績を誇りとし、人々から高く評価されていた人物でした。しかし彼はそれらを「損失」とさえ言い切りました(8節)。人の評価ではなく、神の評価を目標としたからです。そのパウロが14節でこう言います。「キリスト・イエスにあって神が上に召してくださる賞を得るために、目標を目指して走っている」パウロの目標は、イエス・キリストにあって召してくださる神の賞でした。「人に認められたい」「評価されたい」という気持ちは、誰にでもあります。しかし、人の評価というのは変わりやすいものです。

昨日褒められたことが、今日は批判される。あの人には認められても、この人には認めてもらえない。人の評価を目標にして走り続けると、そのうちにゴールがどこにあるのか分からなくなってしまいます。そして気づけば、自分がなぜ走っているのか、何のために生きているのか、自分の使命すら見えなくなってしまう、疲れ切って走れなくなります。神の目を意識して、神の前にどう生きるかが大事なことです。



大学宗教主任 岩上 真歩子

そしてその目標に向かって走るパウロの姿勢が、12節に表れています。「私はすでに得たとか、すでに完全にされたとか言おうとしているではありません」パウロは自分の達成を誇るのではなく、まだ途上にある者として、前に向かって走り続ける姿勢を持っていました。そして13節には、こんな印象的な言葉があります。「うしろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ(身を伸ばし)」 「うしろのもの」——それは過去の栄光かもしれません。あるいは過去の失敗や後悔かもしれません。つい気にしてしまう人からの評価や期待もそうかもしれません。パウロはその一切から目を離し、前にあるキリストだけを見据えてひたすら走り続けたのです。

「ひたすら走る」というと、広い場所を自由に駆け抜ける姿を思い描くでしょう。しかし、実はパウロはこの時獄中にありました。自由が奪われていたのです。自分で選択する自由がない、明日生きられるかどうか分からない。彼がおかれていた環境、状況を想像しながら、パウロの気持ちを想像しながらこの御言葉を読むとまた違う印象を持つのでは無いでしょうか。パウロは、「イエスキリストを宣べ伝えたこと」のゆえに囚われていたのです。パウロが神の賞を得るために行っていたことのゆえに、人々から嫌われ、うとまれました。もし自分が同じ立場ならば、どうなるでしょうか。気持ちが暗くなり、投げやりになってしまうかもしれませんね。「なんで良いことをしているのに、だれかのためにしているのに、人から嫌われるんだろう」と悲しくなるかもしれない。でも、彼は言うのです。「うしろのものを忘れ、前の者に全身を向けつつひたすら走る」と。周りを見ていたら、また、自分の置かれている状況を見ていたらそうは言えなかったかもしれません。でも、パウロは走り続けました。それは、彼が神を見ていたからです。目を上にあげ神を見るとき、神の目だけを意識する時に私たちの心は自由になるのです。神を見上げていきましょう。この神はわたしたちを造り、私たちの罪の贖いのために十字架にかかり、蘇られた方です。そして、「見よ。世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」と約束してくださった方。どのような状況にあっても、人が理解してくれなくても、変わらずに愛に満ち、わたしたちの存在をいつでも受け止めてくださる神です。この神を見上げて、神を求めて「ひたすら」走っていきましょう。

お祈りしましょう

天の神様、人の評価に振り回されず、あなたに目をあげて、「神の賞」を得ることを目標に走り続けることができるように私たちの心を守り、導いてください。イエスキリストの御名によって祈ります。アーメン

祝福

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔の光であなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けてあなたに平和を賜るように。アーメン

みんなの好きな聖書のお話

年長組の子どもたちは、3年間の園生活の中で
神さまのお話をたくさん聞いてきました。

「あなたの好きな聖書のお話は何ですか？」

と尋ねてみると、いくつかの言葉が
寄せられました。



「私はノアさんのお話が好きなの。

ノアさんはね、神さまのことをもとから知っていてね、好きになったの。でも他の人は神さまのことを少しは知っていたの。でも『神さまを信じなきゃ』っていうことまでは知らなかったの。それからね、^{はこぶね}方舟って、はこのふねでしょう？ 水に染みちゃう箱もあるけれど、ノアさんの方舟は染みなかったから頑丈だったのがすごかった！」(N.S.さん)



「僕はね、世界の始まりのお話が好き。神さまの言葉で動物がどんどん増えていったでしょう？ 僕も出来ればいいなあと思うけど、でもできないの。だからそれをできる神さまってすごいと思う」(I.M.さん)

保育者から語られる礼拝での言葉を、心で聴き、想像し、味わっていた子どもたちの言葉が表されました。他にも「僕は羊飼いのお話が好き。あの羊は神さまと羊飼いに助けてもらったから」(N.M.さん)と答える園児もいました。

初めて幼稚園にやってきた年少組の時に、保育者と一緒に祈り、賛美することを通して神さまと出会い、日曜日には教会学校へ出かけ、新たな1週間へと送り出されていく。そうした生活を3年間繰り返し大切にしてきました。これからも青山学院の中で歩んでいくその子どもたちが、神さまの愛に守られてそれぞれの歩みを進めていかれますようにと祈ります。

(文:幼稚園教諭 迫田敏幸)

あなたには、心に残っている聖書のお話がありますか？

今回は、幼稚園から大学の方々に、好きな聖書のお話・聖書箇所を選んでいただき、その魅力や思い出を語っていただきました。

ぜひ、ご自身の好きなお話を思い浮かべながらお読みください。

罪を許してくださるイエスの愛

初等部5年 増田 和

わたしの好きな聖書のお話は、最後の晩餐でイエス様が弟子のペトロに「今夜、にわとりが2度鳴く前に、3度わたしのことを知らないというだろう。」と言われるシーンです。ペトロは嘘をつきました。でも、その時イエス様はゆるしてくださいました。なぜならみんなの罪をゆるし、十字架にかかってくださったからです。ペトロのように人は嘘をつき、罪をおかしてしまいます。しかし、イエス様はゆるしてくださいます。そして嘘をついてしまった人は清い人になるのです。

わたしは4年生のクリスマスに、神さまのご計画によって受洗をしました。教会には1才の時から通っています。わたしはいつも牧師先生に「受洗はいつからできますか。」と聞いていました。そして4年生の10月、牧師先生が「すべてが整いましたよ。受洗、どうですか。」とってくださいました。この時が来たんだと、とてもうれしくなりました。神さまがともにおられる、と思うだけで気持ちが軽くなりました。わたしはイエス様のことを裏切ってしまう行動をしてしまうかもしれません。だけど神さまと一緒に歩み、悔い改めていきたいです。



「宝は、天に積みなさい」

初等部6年 伊波 佳祐



僕は、この春にフィリピン訪問プログラムに参加しました。そこで、僕がまさに体験した聖書箇所があります。それは、箴言13章20節の「知恵ある人と共に歩めば知恵を得る」です。僕は、フィリピン訪問プログラムで、高等部の先輩と9日間、同じ部屋で過ごしました。最初、それを知らされた時には、とてもドキドキしました。けれども、その先輩と一緒に過ごしたり、他の、中・高等部の先輩とコミュニケーションを取ったりしている内に、自分でも実感できるほど、先輩方の影響を受ける出来事がありました。僕ははじめ、何かいいこと

を他の人の前でして、先生や友達に褒められて、喜んでいました。けれども、先輩方は、先生や他人から褒められるためだけでなく、だれも見えていないところで、皆のために、また、フィリピンの子どもたちのために、色々なことをしていました。それはまさに天に宝を積んでいるということだと思います。

マタイ6章20節に「宝は、天に積みなさい」とある通り、僕もこれから先輩方のように、誰も見ていないところでも、心から相手を思っって行動できるような人になりたいです。

■ ノアの箱舟

中部部3年 高園 理紗

このお話が好きな理由

ノアは神さまを信じ続ける正しい人でした。そんなノアを神さまはお選びになりました。ノアは周りの人に理解されず、大変な作業があっても、神さまを信じ続けました。私はそんな彼の姿を尊敬しています。彼のように「自分も正しい人でありたい」と思うようになったことが、このお話を好きになったきっかけです。



その箇所から学んだこと・気づき

私は、ノアが神さまを信じ続けたのと同じように、自分のことも信じ続けていたのだと思います。神さまを信じ、自分を信じていたからこそ、あれほどの大業を成し遂げられたのだと学びました。神さまはいつも私たちを見守ってくださっています。私もこれから神さまを信じ、そして自分を信じて、何事にも恐れずに挑戦していきたいです。

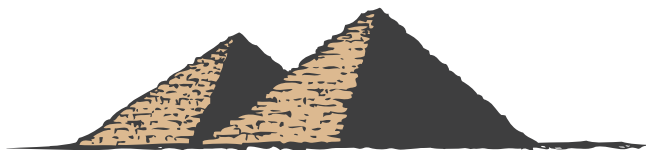


■ 出エジプト

中部部3年 村西 啓吾

神さまはモーセとイスラエルの民にたくさんの奇跡や苦難を与えながらも、彼らを導き、お互いを大切に、世の光になれるようにしようとしました。神さまはただ奇跡を起こされるのではなく、苦難の中にあっても、お互いを大切に、世の光になってほしいと言っていると思います。

僕はつい調子に乗ってしまいそうになる時、このお話が頭の中に浮かび、僕に自制心を与えてくれます。また、苦難を乗り越えることで得られるものがあるのだと思われ、新しいことや苦手なことに取り組んでみようと思うことができます。



一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその部分です。(1コリント 12:26,27)

高等部3年 原 享平

「痛そう、泥臭い」私は高校でラグビーを始める前、ラグビーにそんなイメージを持っていました。しかし今、私はその魅力に深く惚れ込んでいます。ラグビーには品位、情熱、結束、規律、尊重という5つのコアバリューがありますが、特にこのスポーツを象徴するものが「結束」です。15人で戦うこの競技は、一人の選手だけでは勝てず、一人でもタックルを恐れれば負けます。そのためチーム全員が結束し戦う必要があります。自分自身も試合後半、体が痛み「もう無理だ」と思う瞬間私の背中を押すのは、必死に体を張る仲間の姿です。自分を犠牲にしても仲間を助け、信じて託す。体と体がぶつかり合う激しさの中でこそ固い絆が生まれます。聖書には「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです」とあります。ラグビーの結束は、まさにこの言葉そのものです。誰かのミスをカバーし、仲間の輝きを全員で喜ぶ。この「結束の心」を私たちのクラスや部活動といった日常でも大切にしていきたいと思います。



若き日に、あなたの造り主を心に刻め。災いの日々がやって来て「私には喜びがない」と言うよわいに近づかないうちに。(コヘレト 12:1)

高等部3年 鈴木 琉花

この聖句に出会ったのは、中等部のHR礼拝でした。友人が語った「学校生活にもいつか終わりが来るからこそ、毎日を大切に過ごしたい」という言葉が、深く心に残りました。その後、私は部活動での経験を通して、この聖句の意味を改めて実感することになりました。私は吹奏楽部に所属し、夏の大会に挑みましたが、結果は目標に届きませんでした。悔しさや、先輩への申し訳なさで全ての努力が無駄だったとさえ思っていました。しかし、仲間の言葉によって大切なことに気づかされました。たとえ目標は達成できなくとも、努力の過程で培った思い出や、仲間との絆は本物です。二度と戻らないあの貴重な日々こそが、何ものにも代えがたい私の財産なのだと実感しました。今、高等部で過ごしているこの日常にも、いつか終わりが訪れます。だからこそ、当たり前を感じる日々も、時に辛い日と日々もすべてを神さまからの賜物として感謝し、一日一日を大切に生きていきたいです。



「私」という存在

教育人間科学部教授 山本 美紀

しかし、私は信仰がなくならないように、あなたのために祈った。だから、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。(ルカ 22:32)

この御言葉は、ヨハネによる福音書13章1節「過越祭の前に、イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいるご自分の者たちを愛して、最後まで愛し抜かれた。」とセットで、イエス様の愛がどういうものなのか、私という存在の真の姿を示してくれるものと受け取っています。

どちらも最後の晩餐でのイエス様の御言葉です。ヨハネによる福音書では、イエス様が免れないご自身の受難と十字架上の死を覚悟しているのに対し、弟子たちはそれを全く察することがないばかりか、誰が一番偉いか言い争うという、いっそ滑稽にも見える状況を描きます。そのような究極の孤独の中で、それでも弟子たちを「愛して、愛し抜く」ことを貫かれた、相手の出方に依らない神の完全なる愛が際立ちます。この御言葉によって、私は自分がどんなに情けない嫌な人間であっても、「神に愛し抜かれている私」という、神が見ておられる「真実の私の姿」を掴んでいられるのです。

一方、ルカの福音書「あなたのために祈った。だから、あなたが立ち直ったときには、」との御言葉からは、「あなたのためになら、死ぬます！」と豪語するペトロに対し、冷や水を浴びせているのではなく、ペトロがこの後大きな失敗を犯し、どれ程自分に落胆するのかをわかった上で、「祈っているからね。きっと立ち直るから」という、イエス様の優しい励ましが聴こえます。それは、失敗を重ね落ち込むであろう彼への「それでもなお、信頼を寄せ期待している」というイエス様からの篤いメッセージでもあり、ペトロと同じように過ちを犯さずには生きられない私さえ、それでもなお「神に信頼され期待されている私」であることを何度でも思い返させてくれるのです。

熱しやすくどちらかという単純なペトロが弟子たちの筆頭であったこと、また12弟子たちが必ずしも望ましい弟子たちではなかったことを、私は神さまの絶妙な差配と思い感謝してきました。これまでの人生を振り返ってみて、この2つの御言葉には何度も助けられてきました。いつまでもたっても情けない自分にうんざりするとき、私がどのような者かに関わらず、神さまに一方向的に完全な愛で愛し抜かれた存在であり、どんなに失敗を重ねても、事の前にイエス様に祈られ励まされ、信頼をもって期待されて、人生のあらゆる経験が個人的な閉じられたものに終わらない未来が準備されている存在であることを思い起こさせてくれるのです。

十字架の愛が教えてくれた生き方

地球社会共生学部4年 伊藤 小晴

友のために自分の命を捨てること、
これ以上に大きな愛はない。(ヨハネ 15:13)



私が最も好きな御言葉は、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」というイエス様の言葉です。この御言葉は、イエス様が私たち一人ひとりのために十字架にかかってくださったことを示しています。朝目覚めたとき、学校へ向かう道を歩いているとき、忙しさに疲れたとき、何かに苦しんでいるとき。どのような時でも、この御言葉は私に、他の何にも代えることのできない力を与えてくれます。私は自分の力によって救われたのではありません。罪のないイエス様が、私たちの罪を贖うために十字架にかかってくださった、その大きな愛によって救われました。この御言葉を読むたびに、「私はこれほどまでに愛されているのだ」ということを改めて思い起こします。だからこそ私は、自分自身に問かけます。「私の生き方を通して、人々はイエス・キリストを見ることができるだろうか」と。そのためには、人を愛そう、優しくしようと努力するのではなく、まず私自身が神さまの愛を大胆に受け取ることが大切なのだと思います。

この御言葉はまた、神さまから与えられた恵みや賜物をどのように用いるのかについても、私に問いかけ続けてくれます。そして、その問いは、日々の礼拝やキリスト教概論を通してさまざまな角度から学んできた、青山学院のスクールモットー「地の塩、世の光」にもつながっています。私たちは、努力して地の塩や世の光になるのではなく、神さまによってすでにそのような存在として召されています。青山学院大学に入学できたこと、4年間学び続けてこられたこと、学ぶ機会や環境、そして学ぶ力そのものも、私自身の努力だけでは説明できません。すべては恵み深い神様のご計画の中で与えられたのだと信じています。だからこそ、神さまから与えられた賜物は、自分のためだけではなく、人に仕えるために用いるべきものなのだと思います。十字架にかかられるほど私を愛してくださった神さまは、一人ひとりに賜物を与え、それぞれの歩みを導いてくださっています。だから私は、まず神さまの愛を受け取り、信仰をもって歩んでいきたいと思っています。その歩みが言葉や行いとなって自然に表れ、それを見た家族や友人が、私ではなくイエス様を見ることができるような生き方をしていきたいと思っています。

礼拝順序ってなに？

今回は伊藤 悟院長に
お教えいただきました！



院長、おしえてくださ～い！

礼拝ごとにずいぶん中身や順序が違うように感じるのですが、

礼拝の順序に何か決まりごとがあるのでしょうか。

しかも各部の礼拝は朝礼とは違うと言われますが、そもそも礼拝って何なのでしょう。

礼拝について、伊藤 悟院長に聞いてみました！

青山学院で 行われている 礼拝の順序



幼稚園

- 前奏
- 讃美歌
- 聖書朗読
- お話
- お祈り
- 讃美歌
- 後奏

初等部

- 前奏
- 讃美歌
- 主の祈り
- 聖書朗読
- 祈祷
- 説教
- 讃美歌
- 後奏

中等部

- 前奏
- 讃美歌
- 聖書朗読
- 説教
- 祈祷
- 頌栄
- 後奏

高等部

- 前奏
- 讃美歌
- 聖書朗読
- 説教
- 祈祷
- 頌栄
- 後奏

大学

- 前奏
- 招きの言葉
- 讃美歌
- 聖書朗読
- 説教
- 祈祷
- 頌栄
- 後奏

礼拝順序って??

青山学院の各学校では礼拝が行われていますね。左のページにあるように、それぞれ礼拝順序は少しずつ異なっています。また教会で行われる礼拝は、時間も長く、内容も盛りだくさんで、ずいぶん違って見えるかもしれませんが、じつはどの礼拝も、基本的には同じことをしているのです。

礼拝には、つぎのような基本的なかたちがあります。

招き 前奏 招詞 祈り 讃美歌



告白 詩編交読 祈り 黙想
讃美歌



宣教 聖書朗読 説教 祈禱



感謝 讃美歌 主の祈り 献金 頌栄



派遣 祝福 祝禱 後奏



礼拝は、見えない神さまとの「対話」です。

対話ですから、双方向の語り掛けがなければいけません。上の図のなかの、下向きの矢印↓は、神さまから私たちへの語り掛けです。上向きの矢印↑は、私たちから神さまへの語り掛けです。各部の礼拝の順序は異なるように見えますが、じつはこの**対話形式で礼拝が成り立っている点では共通しています。**

礼拝の中の大事な

ポイントはどれ?

礼拝はお話し(説教・奨励など)が中心で、そのほかの賛美歌やお祈りはおまけのように感じている人がいるかもしれませんが、それは間違いです。前奏から後奏まですべてが大事な礼拝を形づくっているのです。**前奏から後奏まですべてが大事な礼拝を形づくっているのです。**

朝、鏡の前に立つように

毎朝、鏡の前に立って自分の顔やヘアスタイルをチェックするのと同じように、礼拝は目に見えない神さまと正面から向き合って、神さまをしっかりと見つめ、自分自身の姿を神さまの前にさらけ出すときです。礼拝は神さまという鏡の前に立つことなのです。

礼拝の中でお話を聞きますが、それは**先生やお話しされる方を通して神さまがあなたに語り掛けているのですね。**

福音のしらべ

礼拝を支える「楽器の中の楽器」

2000年以上にわたる歴史の中で、時代や地域によって姿かたちと役割とを変えながら発展してきた楽器、オルガン。その長い歴史と多様な用途、多彩な音色や広い音域などから、「楽器の中の楽器」ともいわれます。キリスト教の教会で用いられるようになってからは、礼拝の祈りと賛美を支え、人々の信仰生活に寄り添ってきました。このオルガンの歩み、仕組み、そして礼拝での役割について、今号と次号の2回にわたってご紹介します。

オルガンの誕生と発展

オルガンが発明されたのは、紀元前250年頃のこと。その原型「水オルガン」は、現在のエジプトのアレクサンドリアあたりで生まれたといわれています。その後、次第に風を用いて音を鳴らす仕組みへと変化していき、時を告げたり、要人の到着を知らせたり、人々を鼓舞したりするための「道具(オルガノン)」は、やがて楽器へと発展していきます。中世になると西方世界に広がり、教会で用いられるようになりました。

教会音楽とともに

中世からルネサンス、バロック時代にかけて、礼拝においてオルガンは、聖職者の歌唱や会衆賛美を支え、聖歌隊と歌い交わし、また独奏によって祈りや黙想を深めるといった役割を担ってきました。地域ごとに異なる音色や様式が生まれ、それとともにオルガンの楽曲も生まれ、オルガン製作の技術も発達し、それぞれの教会文化を映し出す存在となりました。

大学オルガニストの先生にお話を伺いました



坂戸 真美 先生

●オルガニストになったきっかけは？

小学6年生のとき、生まれて初めてコンサートホールでパイプオルガンと出会いました。無数のパイプを持つ不思議なヴィジュアルに大きなインパクトを受け、ひと目ぼれて、「この巨大な楽器を絶対に弾きたい!」と強く思いました。その時は、オルガニストが一生の仕事になるとは思ってもみませんでした。オルガニストとして生きる道を与えてくださった神さまにいつも感謝しながら音楽をお奉げしています。

●大学のオルガニストとして何を心がけていますか？

讃美歌の伴奏をするときは、主に向かって声高らかに歌う皆さんと呼吸を合わせるように努め、歌詞を芯から受け止め、心を合わせて歌いながら弾きます。前奏・後奏は様々なタイプの曲を選びます。オルガンは歴史が長いので、作品が非常に多く、多種多様です。オルガンの魅力を知っていただくと同時に、それぞれの国、それぞれの時代の祈りとメッセージを伝えたいと願っています。

●あなたにとってパイプオルガンとは？

長年、オルガンのパイプに風を送りながら夢を追いかけて、祈り続けてきました。喜びも悲しみもシェアしてきた親友のような存在です。同時に、私を日々成長させ、常に進化させ、沢山のことを教えてくれる恩師のようでもあります。オルガンという楽器は計り知れない可能性を持っているので、そのポテンシャルを余す所なく引き出すことが出来るように、一生をかけて取り組んで行きます。

●好きな讃美歌

讃美歌 第二編 212番 神よ、義をもてわれを
Samuel Sebastian Wesley, 1810-1876



今回、ウェスレー・ホール・ニュースのために、
坂戸先生に特別に演奏していただきました。

QRコードを読み取ると、今回ご紹介した曲の演奏をお聞かせいただけます。

※動画は都合により、予告なく公開を終了する場合があります。

メソジスト運動を導いたジョン・ウェスレーの弟、チャールズを祖父にもつサミュエル・セバスチャン・ウェスレーによる作品です。その響きには、神への信頼と祈りが静かに息づいています。なお、この旋律は青山学院大学のチャイムとしても親しまれています。

●学生の皆さんへ伝えたいこと

オルガンの鍵盤を押してパイプを通った風が、聖なる風となり、チャペルを満たし、皆さん一人一人の心に届きます。泣きたい気持ちの時も、オルガンの音色が心を癒してくれます。ぜひ大学礼拝に出席して、オルガンの伴奏で讃美歌を歌って下さい。心が晴れ渡り、幸せな笑顔があふれることでしょう!

私の好きな聖書のお話・番外編

「山を移すほどの信仰を持っていても、愛が無ければ無に等しい」

(コリントⅠ 13:2)

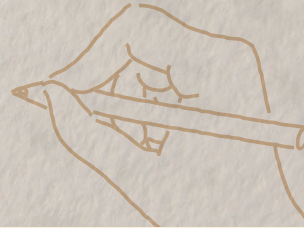


編集後記

神さまの愛は「朝ごとに新しい」(哀歌3章23節)。だからこそ、それに応答して私たちも「新しい歌を歌おう」(詩編144編9節)、常に新しい賛美を、喜びを世界に伝えよう、と願うのです。今回は新コーナーとして、青学を支えてくださる人々の紹介、礼拝順序、パイプオルガン特集、動画視聴への案内、マンガなどを掲載しました。新しい時代に新しい恵みを受けた私たちの「新しい賛美」、青学ならではの誌面を展開します。みなさまのご意見ご感想など、宗教センターの情熱あふれる若いスタッフたちにお知らせいただけると幸いです。

学院宗教部長・大学宗教主任 塩谷 直也

13ページ クイズの答え: ①風



Wesley Hall News へのご感想をお寄せください。



Wesley Hall News 第152号

2026年9月29日発行

発行 青山学院宗教センター
学院宗教部長 塩谷 直也
編集 青山学院 Wesley Hall News編集委員会
〒150-8366
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL03-3409-6537 FAX 03-3409-8865
デザイン 株式会社パットンファイヴ
印刷 株式会社エイチケイ グラフィックス

URL <https://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
MAIL agcac@aoyamagakuin.jp

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(マタイによる福音書 第5章 13-16節より)

Wesley Hall News

ウェスレー・ホール・ニュース

表紙

IVYCS アメニティスタッフ



MESSAGE

礼拝堂がいつも綺麗で落ち着く場所だと
感じていただけることが、清掃のやりがいです。
周りの皆さんに支えられながら、
心を込めて働いています。

青山学院には、日々のさまざまな形で学院を支えてくださる
方々があります。そんなおひとりおひとりの働きをご紹介します。